

Title	性と楯円 : ドゥルーズ最初期論考読解
Author(s)	得能, 想平
Citation	共生学ジャーナル. 4 P.106-P.123
Issue Date	2020-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/75388
DOI	10.18910/75388
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

性と楕円

—ドゥルーズ最初期論考読解—

得能 想平*

Sexuality and Ellipse Reading Deleuze's earliest texts

TOKUNO Sohei

論文要旨

本稿はドゥルーズの最初期論考に見られる思想を性によって根拠づけられる楕円の哲学として特徴づけるものである。本稿は、最初期の論考に見られる「大原則」、「贅沢品」、「共犯性」に関わる議論を再構成することで、ドゥルーズが性を論じる観点、「女性」概念の内実、性と楕円の関係を論じる。本稿は結論の一つとして、「可能世界」としての《他者》との緊張関係を、私の固有性に関わる出来事を肯定する範囲内でのみ意味をもつという主張にドゥルーズの最初期論考の到達点を見ることになる。

キーワード ジル・ドゥルーズ、「女性の記述」、「マテシス、科学と哲学」、可能世界、存在論、ジャン＝ポール・サルトル

Abstract

This paper characterizes the thought of Deleuze's earliest texts as an elliptic philosophy based on sexuality. Reconstructing some Deleuze's arguments, such as "Grand principle" "luxury" and "complicity", we will discuss Deleuze's view of gender, the conception of "Female", and the relationship between sexuality and ellipse. This paper will conclude that the culmination of Deleuze's earliest thoughts is an affirmation that the tension with "Other" as a "possible world" is only meaningful to the extent that it concerns the events as personal identity.

Keywords: Gilles Deleuze, "Description of Woman", "Mathesis, Science and Philosophy", possible world, ontology. Jean-Paul Sartre

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士後期課程 ;
suv_396@hotmail.com

1. はじめに

ドゥルーズはみずからの歩みを振り返るテキストにおいて、次のように述べている。

わたしは哲学史によって多かれ少なかれひどい目にあわされたほとんど最後の世代に属する。哲学史は哲学において明らかに抑圧的な機能を行使する。これはまさに哲学のオイディプスである。(Deleuze 1990:14)

ドゥルーズが、『差異と反復』で自身の哲学を発表するまでに、哲学史研究を行っていたことはよく知られている。そして、「徒弟時代」と呼ばれるこの初期のキャリアが、以降のドゥルーズ自身の哲学の展開に大きな影響を与えたことも知られている (Hardt 1993)。ところで、ここに見られるドゥルーズの言葉は、この「徒弟時代」が抑圧されたものであったことを示すものである。このテキストは、しばしばドゥルーズの逆説的な哲学史への偏愛を示すために引用されてきた箇所であるが、もしこの言葉をそのまま受け取るのであればどうであろうか。「徒弟時代」以前の論考のうちに、ドゥルーズ自身の哲学的出発点のより直接的な表現を見いだすことができるのではないか。本稿は、このような着想のもとで、ドゥルーズの最初期論考の解釈を行うものである。

「徒弟時代」以前の最初期論考が、『書簡とその他テキスト』として出版され、われわれは、ソルボンヌ大学の一学生であった一九四〇年代のドゥルーズの議論に容易に触れることができるようになった。本稿で、最初期論考と呼ぶのは、この『書簡その他テキスト』所収の五つのテキスト—「女性の記述」(1945)「キリストからブルジョワジーへ」(1946)「口にすることと輪郭」(1946)「マテシス、科学と哲学」(1946)「ディドロ『修道女』のための序文」(1947) —である。

この時期の論考に注目する先行研究は多くはないが存在する。鈴木は、ハイデガーの『存在と時間』における現存在分析に対するパロディないしサルトルの他者論に対するドゥルーズの応答というドゥルーズの最初期論考の大まかな見取り図を提示した (鈴木 2002)。Faulkner は、「女性の記述」における言葉遣いの多くがサルトルの議論によっていることを指摘しつつ、

サルトル哲学を「内在」の観点から書き直したものとしてドゥルーズの最初期の思想を捉えていた (Faulkner 2002)。小倉は、ドゥルーズの他者概念の系譜を辿るなかで、「女性の記述」を「男性としての《他者》」と「女性」という二つの他者概念を区別する論考として捉えていた (小倉 2018:148-156)。

ところで、これらの先行研究に共通するのは、最初期のドゥルーズにおける「男性」ないし「女性」概念の位置づけである。最初期のドゥルーズは、性差の素朴なイメージにしたがって議論を進めているかのように見えるが、それらは、生物学的性や社会的性を直接的に問題にするものではなく、あくまでも「私」という一人称的なパースペクティブ性における二種類の「他者」のあり方を論じているものである。少なくともこの点に関して、先行研究において合意があるように思われる。またドゥルーズが「他者」概念の区別に性的な語彙を用いた理由については、サルトルの『存在と無』からの影響を考えることができるだろう⁽¹⁾。

本稿は、このことを踏まえつつ、最初期ドゥルーズの思想を「私」という一人称的なパースペクティブにおける「男性」と「女性」という二つの他者のあり方に関する哲学として特徴づけるものである。具体的に言えば、A：ドゥルーズの最初期論考が「チーム」と呼ばれる「私」のパースペクティブのあり方を批判し、別のパースペクティブのあり方を探求する目的をもつものであること、B：この新しいパースペクティブ性のあり方は「男性」と「女性」という二つの極をもつという意味で「楕円」のパースペクティブ性として示されること、これら二つのことを示すものである。

第二節においては、まずドゥルーズが批判対象とする「チーム」としてのパースペクティブ性のあり方を確認する。第三節では、「女性」概念の内実を明らかにする。われわれはここで、パースペクティブの個性性を保証すると同時に詳細なディティールを持つ現われとしての「女性」のあり方を確認することになるだろう。第四節では、ドゥルーズが構想する「楕円」のパースペクティブ性のあり方を確認する。結論を先取りするのであれば、われわれはここにおいて、パースペクティブ内に存在する「男性」が「女性」を肯定するかぎりにおいて意義をもつというドゥルーズの主張を見いだすことになるだろう。

2. 「チーム」について

本節では「私」と「男性としての《他者》」の関係性として記述される「チーム」としてのパースペクティブ性のあり方を確認する。五つの最初期の論考のうち「女性の記述」、「キリストからブルジョワジーへ」、「口にすることと輪郭」の三つの論考は、微妙に言葉遣いは変化するものの、冒頭で「チーム」というパースペクティブ性のあり方を導入する点で共通している。本節では、まず「チーム」を初めて取り上げた「女性の記述」を参照し、その内実を確認する。そのあと、他のテキストも参照しつつ、「チーム」と「女性」概念の関係を取り上げる。最後に、ドゥルーズが、パースペクティブにおける原理としての性を論じる点を確認する。

「女性の記述」の冒頭には、非人称的な所与のパースペクティブから「私」と「男性としての《他者》」の区別が発生するという形式の議論が見られる。議論の前提になる重要な箇所であるので、われわれはやや詳細にこの議論を確認していくことにする。

大原則。諸事物は、諸事物の意味を持つためには私を待つことはなかった。もしくは、少なくとも記述的な観点においては同じことに帰着するのであるが、私は、諸事物が私を待っていたという意識を持たない。意義は事物のうちに客観的に書き込まれる。例えば、疲れさせるものがあり、それだけである。大きな丸いこの太陽、上っているこの道、腎臓の窪みにおけるこの疲れ。私はそこでは何ものでもない。疲れているのは私ではない。私は何も発明しない。私は何も投影しない。私は何も世界に到来させない。私は何ものでもないし、無でさえない。それもとりわけ無ではないのである。つまり表現でしかない。

(Deleuze 2015:254)

ドゥルーズはパースペクティブ性を問題にするうえで、まず私と諸事物のあり方が区別されない非人称的な世界を想定する。この世界において、感じられる私の「疲れ」は、諸事物に書き込まれた「意味」にすぎない。要する、ここで記述されているのは、諸事物の秩序からめとられ、「私」とさえ言うこともできない一人称パースペクティブのあり方である。

このような非人称的な世界において、あるとき「男性としての《他者》」

が現れることになる。ドゥルーズはこの「男性としての《他者》」を「可能世界の表現」という言葉を用いて記述する。

[男性としての]《他者》は、この疲れさせる世界のうちにある。しかし、その態度とそのすべてのふるまいによって、つまり、そのしなやかな歩みと、その穏やかな息遣いと、その快活さによって、他者は、そこにおいて疲れさせるものが存在しない世界を表現することができる。これこそが《他者》、すなわち「可能世界の表現」である。不在の外部的世界の表現、表現されるものなしに表現するもの。(Deleuze 2015:254)

「男性としての《他者》」は、非人称的世界のうちで「可能世界」を表現するものである。例を用いて述べるならば、疲れさせるものしか存在しない非人称的世界で、「疲れさせるものが存在しない世界」を表現する人間の態度や振る舞いがこの「男性としての《他者》」である。さらにここで表現される世界が、「不在」という形式をもち、パースペクティブの「外部」であることも付け加えておこう。要は、「男性としての《他者》」とは、一人称パースペクティブのうちで、それ自身とは異質なパースペクティブを表現するもののことである。

「私」が現れるのは、「男性としての《他者》」が現れるのと同様であるとされる。というのも、「男性としての《他者》」が現れることで、非人称的世界のうちに、「男性としての《他者》」の世界と「私」の世界の区別が生まれるからである。ドゥルーズはこのような区別の結果、パースペクティブのうちに、社会的な感情の動きが配分されるとも述べている。「男性としての《他者》」の出現によって、「私」は、「私」の世界に対して、「責任」を感じるようになり、「可能世界」を表現する《他者》に対しては、「恥」、「臆病さ」、「表に出ない憎しみ」を抱くようになるのである (Deleuze 2015:255)。

ドゥルーズが批判対象とする「チーム」とは、端的にいえば「男性としての《他者》」優位なパースペクティブのあり方である。ドゥルーズは次のような「私」の問いを取り上げる。《他者》とは、「友情の申し出」と考えられるのではないか。つまり、「疲れ」を感じる「私」は、《他者》を引き受け、疲れさせるものが存在しない「可能世界」を実現する努力をすべきではないのか (Deleuze 2015:255)。ドゥルーズは、「可能世界」への「私」の世界の同化を試みるパースペクティブのあり方を「チーム」と呼び、それに対して以

下のように述べる。

楽観的な見方である。この見方はどれだけの犠牲を払えば確かめられるだろうか。そして本来的なものにとって、憎しみと友情のおのおのの意味はどのようなものだろうか。ここにこそ、《他者》の問題のすべてがある。そして、これはわれわれの問題ではない。われわれは、女性の記述が、男性としての《他者》の参照なしになされえないかぎりにおいてしか、この《他者》の問題について話さないだろう。(Deleuze 2015:255)

われわれは、ここに二つのことがらを見て取ることが許されるだろう。第一に、「私」の世界の固有性を犠牲にして《他者》の世界と一致させることに対するドゥルーズの疑念がある。第二に、「女性」を考えることの必要性である。われわれは、以下で他の最初期論考を参照することで、最初期ドゥルーズのこのような二つの態度をより明確していく。

「キリストとブルジョワジー」は、「チーム」の考え方を当時の社会分析に適用したものであり、われわれはこれを通してドゥルーズの「チーム」批判の内実を明確化することできる。ドゥルーズは、ド・ゴール政府やサルトルを例に挙げて、当時のリーダーが、おのおのの個人に「自己犠牲」を求めている点を指摘する (Deleuze 2015:266-267)。ド・ゴール政府は「フランスは偉大である」という「可能で外部的な世界」を表現し、そのような理念に同化するように労働者たちに迫っている (Deleuze 2015:267)。サルトルは「フッサール現象学の根本的理念」において、湿っぽさというイメージにおいて、「私」の世界を罵倒し、間主観的な領域である「外部性」の優位を強調する「新しい信仰」を打ち立てている (Deleuze 2015:268)。要は、ドゥルーズの「チーム」批判とは、「自己犠牲」を求める「リーダー」というあり方に対する批判なのである。

「口にすることと輪郭」のうちには、「チーム」と「女性」の関係をより明確に示す記述が見いだされる。

しかし、おそらくこのチームの世界を十分に理解し、そこに参加することができるためには、同様に、このチームの世界に一つの脅威として重なる別の世界 [=女性]、つまりチームメイトのあいだで一定のあいだだけ出現し、チームメイトたちのつながりを壊し、そのつながりを別のつながりに対抗させ、チームメイト

たちをライバルにしうる、この別の世界を知る必要がある。《チーム》は凡庸さから逃れるための唯一の手段である。しかし、多くの人々は恨みを選ぶことしかできなかった。このことを十分に知る必要があり、この多くの人々の愛こそが、この多くの人々にチームを拒絶させるのである。(Deleuze 2015:277)

「私」が「チーム」に参加するためには、「別の世界」を知る必要がある。というのも、多くの人々のチームを拒絶する原因がこの「別の世界」にあるからである。そしてこの「別の世界」が「女性」と呼ばれるものである。「女性」の内実については次節で確認するが、われわれはここで、ドゥルーズが「女性」を障害として取り除こうとしているわけでもないし、反対に「男性」の世界を排除しようとしているわけでもない点を確認しておきたい。「《チーム》」こそが「凡庸さから逃れるための唯一の手段」であり、このような「チーム」への参加を、ド・ゴールやサルトルが人々に求めた「自己犠牲」とは異なる仕方では考えるためにこそ、「女性」の世界の探求が必要とされるのである。

本節では、パースペクティブにおける「私」と「男性としての《他者》」の区別、「私」に「自己犠牲」を強いる批判対象としての「チーム」という考え方、「女性」概念の必要性などを見てきた。これらの議論を振り返ってみるならば、最初期ドゥルーズにとっての性の区別が、生物学的性や社会的性を示すものではなく、パースペクティブ性を考えるための原理として用いられていることがわかるだろう。確かに以下でも見るように、一九四〇年代当時の女性のジェンダーイメージを着想源とするドゥルーズの議論には非常に危ういものである。本稿はそのような議論を、ドゥルーズのパースペクティブの考え方を明らかにするかぎりにおいて解釈することにしたい。

3. 「女性」概念の内実

本節では、「女性の記述」に見いだされる「女性」は「贅沢品 (*objet de luxe*)」であるという主張に注目することで、「女性」概念の内実を確認する。このような主張は、文字通り理解するのであれば、女性を物として扱っている点や、社会的イメージを押し付けている点で、性差別的なものと言うほかない。しかし、パースペクティブのあり方を探求するための記述として読むので

あれば、この主張は、「女性」概念の重要な特徴を示すものとして現れてくる。あらかじめ本節の結論を述べておくのであれば、「女性」とは、「私」の固有性を保証する絶対的な出来事を表現する、細かすぎるディティールを持つ現われのことであり、「私」がそれを通して「私」の世界の拡張を欲望するものである。

ドゥルーズは「女性」が二つの仕方で「贅沢品」であり、役に立たないものであると主張する (Deleuze 2015:257)。これは、一見するとミソジニ的言説に思われるが、ドゥルーズの意図は、「私」から見ても「男性としての《他者》」から見ても、異質なものとして「女性」がパースペクティブに与えられていることを示す点にある。以下でその記述を確認していく。

第一に、「女性」は「私」にとって役に立たないものとされる。

[贅沢品とは] 第一に、非常に正確で、非常に細かく、非常に貴重であることで、その対象が適用をもちや持たない対象である。つまり非常に直接的にその所有者に訴えかけるので、所有者が、行為するためにみずからをその対象において根拠づけることができない余分な対象である。実際、行為する私はずねに代替可能であり、ずねに多かれ少なかれ誰でもよく、決して唯一のものでない。行為する私の向こう側で、贅沢品はより深い、より内部的で、より女性的な私に、例えば、一本の煙草に役に立たない自分のイニシャルが印刷されているのを見て嬉しがっているような私に、向けられている。(Deleuze 2015:257)

「私」の世界とは、そこにおいて「私」が疲れる世界であるだけでなく、そこにおいて「私」が行為する世界でもある。そのような「私」の世界の中で、「女性」は、非常に正確で、細かく、貴重な対象として現れるので、その「所有者」である「私」は、どのように用いればよいかわからない。しかし、そうであるにも関わらず「女性」は、行為する「私」ではなく、「より深い、より内部的で、より女性的な私」に直接的に訴えかけることで、私の固有性を保証する現われなのである。例えば、一本の煙草に自分のイニシャルが印刷されているのを見ると、「私」はこれが何のためにあるかわからないが、えも言えぬよう満足感を感じることがあり、「女性」とはこのイニシャルのようなものである。われわれはこの意味での「女性」を、独特の情感と細かすぎるディティールをもつ、「私」の固有性を保証する現われとまとめることができるだろう。

第二に「女性」は、男性としての《他者》にとっても役に立たないものである。

[他方で] 贅沢な存在が用いる贅沢品である [という意味で役に立たない]。つまり今度は非常に一般的かつ広大なので、いかなる使用も特別すぎるものになってしまう。この意味で、女性は宇宙的である。女性は事物かつ意識であり、意識における事物であり、事物における意識である。そして単なる意識、[つまり] 自己意識は、それが宇宙の係数のために用いる物質を保持し、その物質を自己への回帰へと歪める。女性の意識は不在の外部的世界の複数性に開かれているのではなく、女性の意識が可能化させ、普遍化させる物質に閉じこもっている。(Deleuze 2015:257)

ドゥルーズの記述は非常に圧縮され難解であるが、以下のように解釈できるだろう。「女性」は、細かすぎるディティールをもつことで「私」の行為の対象にはならないものを指すのであった。ところで、逆に今度はこの対象を用いる「贅沢な存在」、つまり「宇宙」を対象とする神のような主観を考えてみよう。このとき、この「贅沢な存在」は、非常に一般的かつ広大であるので、「女性」の使用は特別なものになってしまう。「女性」の使用は、もはや行為というよりも「私」の固有性に関わる特異的かつ普遍的な出来事(例えば、「私」の誕生や死)のようなものとなるだろう⁽²⁾。「私」の世界は、行為をおこなうための「単なる意識」ないし「自己意識」としてのパースペクティブであり、そこでは「物質」が歪められてしまっているので、「女性」を行為の対象とする「女性の意識」が与えられることはない。同様に、「男性としての《他者》」たちが表現するおのおの「不在の外部的世界」も世界の部分的な表現であるので、「女性」を用いる「意識」へとたどり着くことはできない。この意味で「女性」の現われは、「私」の世界の外部であり、「可能世界」の外部でもある、「宇宙」、言わば絶対的な可能世界を表現するものであるので、「男性としての《他者》」も「女性」を用いることができないのである。

さらに続く以下の箇所は、このような「女性」に対する「私」の欲望のあり方が示唆されている。

女性は具体的普遍であり、女性は世界であり、外部的世界でなく、むしろ世界

の裏側、世界の生暖かい内部性、内部化された世界の圧縮物である。ここから女性の驚異的な性的成功がくる。女性を所有すること、それは世界を所有することである。(Deleuze 2015:257)

「女性」は「具体的普遍」、つまり世界のそのつどの歩みにおいて具体的なしかたで現れるないし世界そのもののことである。この意味で、「女性」は独特の情感と細かすぎるディティールを伴う現われであると同時に「内部化された世界の圧縮物」として宇宙を表現するものである。ところで、「私」はこのような「女性」を「所有する」こと、つまり行為の対象とすることを欲望する⁽³⁾。要は、「私」は、「男性として《他者》」のあり方を超えて「私」固有性に関わる出来事をやり直すことできる状態を望んでいるのである。

とはいえ、ドゥルーズは、あくまでもこのような欲望が実現されないと考えている点も付け加えておかねばならない。女性は、欲望をかき立てる存在であると同時に、「見ることはできるが触れることができないもの」ないし「私の範囲内にあるが到達することができない」ものとしての「ヌーメノン」的な特徴をもつものである (Deleuze 2015:261)。要は、「私」は、「私」の固有性に関わるものを、情感とディティールを伴った現れとして「見る」ことはできるものの、それに「触れること」すなわち、私の固有性に関わる出来事をもう一度やり直すことはできないものと見なされるのである。

本節では、女性は「贅沢品」であるという主張に関わる「女性の記述」の議論を注釈するなかで、女性概念の内実を見いだした。「女性」とは、行為の対象とならない独特の情感と細かすぎるディティールを持つ対象として現れ、私の固有性に関わる出来事を絶対的な仕方では表現するものである。われわれは次節において、このような「女性」概念が、いかなる意味で「チーム」とは異なる新しいパースペクティブ性のあり方と関わるかを確認する。

4. 「楕円」の哲学

「マテシス、科学と哲学」は、偽名の著者ジャン・マルファッティの『マテシスあるいは科学におけるアナキーとヒエラルキーの研究』の仏訳につけられた序文として書かれたものである⁽⁴⁾。しかし、その内容は、この著書を要約しようとする性格のものではなく、むしろマルファッティが述

べるインド文明において展開される「マテシス」が、「西洋の心性」の真ただ中における、ある「根本的な欲求」を満たすものであることを示そうと試みるものであり、マルファッティが述べる「マテシス」に対しては「外的な」ものである (Deleuze 2015:288)。そのために、この論考のうちに、ドゥルーズの最初期思想の反映を見いだすのはそれほどの外れではないだろう。

実際、われわれはこの論考のうちに、「女性」概念を踏まえた「共犯性」ないし「楕円」として象徴化される新しいパースペクティブ性のあり方を見いだすことができると考える。われわれは簡単に文脈を確認しつつ、「マテシス、科学と哲学」における「チーム」と「共犯性」の議論を辿り、そのうえでドゥルーズが「共犯性」としてのパースペクティブ性のあり方を「楕円」によって象徴することを見る。

ドゥルーズは、「科学」と「哲学」が「具体的生」において統一されうるという点から議論を始めている (Deleuze 2015:288-290)。以下でその内容を簡単にまとめておこう。「科学」が「思考の対象」の次元において「現実性」を捉えているのに対して、「哲学」は「認識する主体」との関係において捉えている。このような対立は「延長実体と思考実体とのあいだのデカルト的対立」と呼べるものである。しかし、ドゥルーズは、デカルトが実践的な「具体的生」において、科学と哲学の統一を考えていたことに注意を促し、このレベルにこそ、インドの文明における「マテシス」に対応するものがあるとドゥルーズは主張する。

ドゥルーズはこの「具体的生」について、次のように述べる。

生は、第一に、生きるものによってかつ生きるものにおいて、[つまり] 生を作動させる個体的組織においてとは別の仕方では実在するようには思われない。生は、そこにおいておのおのの生きるものが自分のために生を実現する、これらの断片的かつ閉じた引き受けによってしか実在しない。これがすべてであり、孤独のうちにある。言い換えれば、生の共同体である普遍性はみずから自身を否定し、おのおのの生きるものに単純な外、生きるものに疎遠にとどまる外部性、《他なるもの》としてみずからを与える。[ここに] 人間の複数性がある。

(Deleuze 2015:290-291)

「具体的生」には、「生」、「生きるもの」、「《他なるもの》」という三つの区別がある。普遍的なものである「生」は、個体としての「生きるもの」ない

し、その「生きるもの」のうちで生きられる世界としてのみ実在する。ただし、「生きるもの」によって個体化された「生」は「生」の「断片的で閉じた引き受け」でしかない。つまり、「生きるもの」によって引き受けられなかった「生」の部分が存在する。この「生きるものに疎遠にとどまる外部性」が、《他なるもの》である。要は、「具体的生」とは、「生」のある部分を引き受け、「生」の別の部分を外部に置く人間の形象において理解されるものなのである。

「具体的生」について述べられる三つの区別は、われわれが確認してきた「女性」の世界、「私」の世界、「男性としての《他者》」の世界に対応している。普遍的なものとして存在する「女性」の世界があり、「私」はこの世界を部分的に引き受けることで「私の世界」を作る。このとき、人間に残る臍のように、「私」の固有性を保証する現われが「私」の世界のうちに残ることになる。さらに「私」によって引き受けなかった世界は「可能世界」として、「男性としての《他者》」によって表現されることになる。このような意味で、「マテシス、科学と哲学」において論じられる「具体的生」の議論は、これまで確認してきたパースペクティブ性の議論と重ねることができものである。

このことを踏まえつつ、「マテシス、科学と哲学」で論じられる「チーム」と「共犯性」の考え方を確認していこう。まず、「チーム」とは、「男性」の世界と「女性」の世界が混同され、二者関係としてパースペクティブ性をとらえる考え方とされる。

実際、チームは、その普遍性がみずからを危うくしたり、みずからを断片化させることができない共通の世界 [= 「女性」の世界] の実現である。そしてこの共通の世界の実現は、この実現の途上で、チームメンバー同士の置き換えが無差異であり、可能なものというようなものである。(Deleuze 2015:291)

「チーム」とは男性が、断片化されえないものとして「共通の世界」、つまり「女性」の世界を実現すると称する際の、パースペクティブ性のあり方である。このとき、チームメンバーと見なされるおのおのの「私」は区別されない仕方で置き換え可能なものと見なされ、共通の世界の実現のために「自己犠牲」を求められることになる。「マテシス、科学と哲学」においては、当時の「哲学」や「科学」がチーム的なものとして批判されている (Deleuze

2015:291)。

他方で、ドゥルーズは「共犯性」について以下のように述べる。

反対に、共犯性においては、共通の世界 [= 「女性」の世界] は確かにあるが、その共通の世界を共同体 [= 「男性」の世界] にするのは、もう一度述べておくが、おのおのが、共通の世界を他の人々との共通の尺度なしで、可能な置き換えなしで、自分のために実現しなければならないからである。主要な人間的現実性、誕生、愛、言語、死はこの同じ輪郭を描くことは明らかである。[例えば] おのおのは、死の記号のもとで、置き換え不可能なものとして実在し、取り換えられることができない。まさにここにおいて、死の普遍性がある。同様に、生は、そこにおいて普遍的なものとその固有の否定が一つでしかないこの現実性である。(Deleuze 2015:291)

「共犯性」は、「女性」の世界において「私」が固有の仕方ですべて「生」を引き受けるかぎりにおいてのみ、「男性」の世界が存在するというパースペクティブ性の考え方である。まず「女性」の世界で起こる私の「誕生、愛、言語、死」といった出来事があり、「私」の世界では、その「記号」が「女性」として現れる。そしてこの「シーニュ」に対応するかぎりのものとしてしか、「男性」の世界はパースペクティブのうちには与えられない。われわれは、「共犯性」のパースペクティブ性のあり方を以下のようにまとめることができるだろう。パースペクティブ内に存在する「男性としての《他者》」は、同様に存在している「女性」を肯定するかぎりにおいて意義をもつ。

さらに重要な点は、「共犯性」が、「普遍的なもの」に関わる二つの方法を示唆している点である。一方で、われわれは、「女性」を通して、「普遍的なもの」としての自分自身の固有性を直接理解することができるように思われる。「女性」の現われは、普遍的な「女性」の世界における、私の「誕生、愛、言語、死」などといった出来事を直接反映しているため、「私」は、パースペクティブに存在する独特の情感と細かすぎるディテールをもつ対象を同定することさえできれば、自己認識に至ることが可能であるように思われる。他方で、われわれは、「男性」の世界をより豊かにすることを通して間接的に「普遍的なもの」を理解することもできる。「男性」の世界は、「私」が固有の仕方ですべて「生」を引き受けるかぎりにおいてのみ存在する、「私」の外部性である。ところで、われわれは、たとえ「私」の固有性が失われる

にしても、この「男性」の世界を極限にまで同化することによっても、「普遍的なもの」を認識することができるように思われる。ドゥルーズはどちらの認識に優先させているのだろうか。

ドゥルーズの物言いは曖昧であるが、どちらも必要であるというのが、彼の答えであるように思われる。ドゥルーズは以下のように述べる。

生きるものはその個性性に固執する瞬間にこそ、普遍的なものとしてみずからを肯定する。生きるものが、生の普遍性を外として定立することで自己自身に閉じこもっていたとき、その生きるものは、実際この普遍性が生を内面化することを見ていなかった。つまり、自分のためにこそ、生きるものはこの普遍的なものを実現し、みずからをマイクロコスモスとして定義する。マテシスの第一の目的は、生とのその関係における生きるものの意識化を保証することであり、このようにして個体的運命の知の可能性を根拠づけることだ。(Deleuze 2015: 291)

常に前提となるのは、「私」がその個性性に固執することである。「私」がその個性性に固執せず、外に定立された生の普遍性としての「男性」の世界に閉じこもるとき、「私」は、この「男性」の世界が、普遍的なものを表現していることに気づけない。「自分のために」という条件においてのみ、「男性」の世界が「個体的運命の知の可能性」に根拠づけられることになるのである。要は、「女性」の知の範囲内にあることこそが、「男性」の知が普遍的なものを示すための条件なのである。

ドゥルーズは、このような人間のあり方をマルファッティの言葉を借りて「楕円」として象徴化する。この「楕円」は、「円」として象徴化される「神」と対比され、男性と女性という二つの極を持つものとして記述されるものである。以下ではまず「円」＝「神」の世界の記述から確認しよう。

したがって、特に人間的概念はどのようなものになるのだろうか。神、つまり本質と実在の一性は、等価性と静止、内焦点的なゾーンの無差異、前発生的な生などを示す、円によって概念化される。(Deleuze 2015:296)

「神」は「本質と実在の一性」である。これはつまり、「男性」の世界と「女性」の世界の混同を認める観点であり、「円」が象徴化するのは「チーム」の関係である⁽⁶⁾。絶対的な共通世界としての「円」は、置き換え可能な「自

己犠牲」を要求する神の自由を象徴化するのである。

それに対して「共犯性」は「楕円」として象徴化される。

反対に、楕円において、むしろつねに運動状態にある楕円面において、ひとは諸焦点の切り離し、二元性、性的な対照法を再び見いだすだろう。空間は限界なしの円から制限された楕円への移行である。時間は、中心の一性から諸焦点の二元性への移行である。こうして三次元 [=パースペクティブ性] が生まれた。(Deleuze 2015:296)

「共犯性」において、焦点は二つあり、「性的な対照法」によって示される。これまでの議論の見てきたように、一方の焦点は、外部性としての普遍的なものを実現する「男性」であり、もう一方の焦点は、私の固有性の出来事を表現する独特の情感と細かすぎるディティールをもつ対象としての「女性」である。置き換え可能ではない仕方、「私」のパースペクティブ性を考えるためには、この二側面が不可欠である。さらにドゥルーズは、パースペクティブ性の三項関係を、「愛」の種類に結び付け、次のようにも述べる。

この意味で、性的愛は同時に自己の愛と種の愛であり、人間は内部的になったのであり、人間は外部的になりつつあるのである。他方で、「生きるもの—普遍的生」と「種としての普遍的生—神性」を支配する対応を思い出さなければならない。(Deleuze 2015:297)

「性的愛」には「女性」、「自己の愛」には「私」、「種の愛」には、「男性」が対応する。ここで「共犯性」としてのパースペクティブ性は「女性」優位なものとして描かれる。「女性」への愛は、同時に「私」への愛と「男性」への愛である。そしてこの「女性」への愛によってこそ、「私」の世界が形成され、同時に「私」の「可能世界」への同化が少しずつ進むのである。そして、ここには、二つの普遍的なものについての認識が関わっていることも忘れてはならない。一方でわれわれには、「私」の世界における「女性」の現われを探求する「生きるもの—普遍的生」という認識があり、他方で、「可能的世界」に完全の同化することを目指す「種としての普遍的生—神性」という認識がある。ドゥルーズはこれらの「対応」を示唆しているが、来るべきパースペクティブ性について、ドゥルーズの最初期論考のうちにこれ以上の内実を見ることは難しいだろう。

そうはいつでもわれわれはここに「チーム」を批判した「女性の記述」以来のドゥルーズの思考の一つの到達があると言っていることができるだろう。ドゥルーズは「女性の記述」において次のように述べていた。

そして本来的なものにとって、憎しみと友情のおのおのの意味はどのようなものだろうか。ここにこそ、《他者》の問題のすべてがある。そして、これはわれわれの問題ではない。われわれは、女性の記述が、男性としての《他者》の参照なしになされえないかぎりにおいてしか、この《他者》の問題について話さないだろう。(Deleuze 2015:255)

確かに「女性」の知と「男性」の知のあり方が、いかなる仕方パースペクティブ性のうちで関わり合うかについては、未だドゥルーズは扱えていない。しかし、ここで論じていた「男性としての《他者》」に対する「憎しみ」と「友情」の意味については、これまでの議論から一定の答えを考えることができるだろう。「男性としての《他者》」に対する「憎しみ」は、私の固有性を明らかにする「女性」の知へと促す。他方で、「友情」はこの「女性」の知が示す範囲内においてのみ意味をもつ。パースペクティブ性の議論において、私の固有性を成り立たしめている現われを導入すること、ここにこそ、ドゥルーズの最初期論考の争点があったと言っていることができるだろう。

5. 結論

本稿はまず批判対象となる「チーム」、すなわち「男性」優位のパースペクティブのあり方を確認した。ここにおいて、ドゥルーズの「女性」概念が、この「チーム」に代わる新しいパースペクティブ性のあり方を考案するために探求されるものである点を確認した。次に、行為の対象とならない独特の情感と細かすぎるディティールを持つ対象として現われ、私の固有性に関わる出来事を絶対的な仕方では表現する「女性」概念について明らかにした。最後に、「女性」によって条件づけられる範囲内で「男性」へ同化する「共犯性」ないし「楢円」としてのパースペクティブ性のあり方を確認した。これらを踏まえて、パースペクティブ性の問題のうち、私の固有性を成り立たしめている現われを導入することこそドゥルーズの最初期論考の争点で

あったことを示した。

最後にこの「楕円」のパースペクティブ性と、以降のドゥルーズの歩みとの関連で二つ述べておきたい。

第一に、「私」のパースペクティブにおいて、「女性」の現われを実際に決定できるのかという問題が残っている。われわれは、これまで「女性」を、独特の情感と細かすぎるディティールを持つ対象と規定してきたが、現実問題として、おのおのの個人にとって、与えられたある対象が「女性」であるのかどうかを決定することは困難である。ドゥルーズは「女性の記述」の最後において次のように述べている。

愛撫は愛のすべてを使い果たしているのだろうか。確かに愛撫は愛の可能性を根拠づける。しかし、愛は、愛撫の向こう側に、全く別の問題を立てる。不純さ。不純さは女性の力学の部分となす。もしくは望むのであれば、道徳的記述の部分となす。こうしてひとは本質の記述を離れる。(Deleuze 2015:265)

ここで「愛撫」と述べられているものが何であるかは問題にしない。注目したいのは女性への「愛」の問題は、「不純さ」の問題を立てるという点である。これは、おそらく『存在と無』における「純粋な反省」と「不純な反省」の区別を示唆するものであり、要は「私」が愛していると見なす対象と、実際にそうである対象のズレが問題になるということの意味する。いまだ「本質」の記述にとどまっている最初期論考はこの問題を扱うことができていない。しかし、われわれは、後のトゥルニエ論を含む文学論のうちに、この点に関する議論を見いだすことができるように思われる。

また、「女性」の知と「男性」の知がいかなる「対応」をもつのかという問題も残っている。私の固有性を示す「女性」の現われと、私の固有性そのものを否定する「男性」への同化のあいだには、明らかに異質性があり、「楕円」のパースペクティブ論を考えるうえで、避けることができない問題の一つと言えるだろう。ただ、この議論に関してもドゥルーズの後年の著作のうちに深化が見られるように思われる。いろいろな例を挙げられると思うが、例えば、『千のプラトー』における、「知覚しえぬものなること」は、すべての生成変化の「内在的帰結」であると同時に、「みんなと同じになること」とされる (Deleuze and Guattari 1980:342-343)。このような概念は、「私」の固有性を探求することと社会への同化が同じパースペクティブのうちで比

例するあり方を示す例と述べることができるだろう。

このような意味でドゥルーズの最初期論考は、ドゥルーズの哲学的な出発点をはっきりと告げているように思われる。

注

- (1) Faulkner が参照を促す『存在と無』の「愛撫」に関する箇所には、「性的欲望」の対象として、一般的な「対他存在」とは区別される「肉」としての「他者」が「女性」として論じられている（Faulkner 2002:36）（Sartre 1943:430）。ドゥルーズはここでの記述に触発されて、「他者」の区別を性差によって記述したように思われる。
- (2) 「マテシス、科学と哲学」においては、このようなものが例として用いられている。第四節の議論も参照。
- (3) ドゥルーズは、対象を所有することを行為の条件と考えているように思われる。Sartre（1943）の第四部の議論を参照。この時期のドゥルーズがサルトルの影響を受けていたことはよく知られている。
- (4) この論考の詳しい背景については、Kerslake（2009）が詳細な解説を参照。

参考文献

- Faulkner, Keith W. 2002. DELEUZE IN UTERO: deleuze-sartre and the essence of woman. *Angelaki: Journal of the Theoretical Humanities* 7:(3):25-43.
- Kerslake, Christian. 2009. The Somnambulist and the Hermaphrodite: Deleuze and Johann de Montereigio and Occultism. <https://culturemachine.net/interzone/somnambulist-and-the-hermaphrodite-kerslake/> (2019/10/30 アクセス)
- Deleuze, Gilles and Félix Guattari. 1980. *Mille plateaux: Capitalisme et schizophrénie*, 2. Paris: Minuit.
- 1990. *Pourparlers 1972-1990*. Paris: Minuit.
- 2015. *Lettres et autres textes*. éd. préparée par David Lapoujade. Paris: Minuit.
- Hardt, Michael. 1993. *Gilles Deleuze: An apprenticeship in philosophy*. Minneapolis: University of Minnesota Press. （ハート、マイケル 1996 『ドゥルーズの哲学』田代真、浅野俊哉、井上撰、暮沢剛巳訳、東京：法政大学出版局。）
- Sartre, Jean-Paul. 1943. *L'Être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique*. Paris: Gallimard. Edition citée, 2007 Paris: Gallimard, coll. « Tel »（サルトル、ジャン＝ポール 1956-60. 『存在と無』松浪信三郎訳、京都：人文書院。）
- 小倉 拓也 2018 『カオスに抗する闘い』人文書院。
- 鈴木 泉 2002 「雀斑と倒錯—ドゥルーズの最初期思想瞥見」『神戸大学文学部紀要』29:19-64。